

第2回 女川町 支援活動レポート

(宮城県牡鹿郡女川町 各所にて)



頑張ろう日本！ 頑張ろう東北！

平成23年7月10日(日)
東北被災地応援団 白金支部
工藤 史大

第2回 女川町 支援活動レポート

このたびの東日本大震災により亡くなられた方のご冥福を心からお祈り申し上げますとともに、被災された皆様に対し心からお見舞い申し上げます。被災地の一日も早い復興を心からお祈り申し上げます。

1. はじめに

前回の女川町訪問より約50日後に再訪する運びとなりました。
前回の訪問時に現地にて感じたことや気付いたことを踏まえ、復興までの継続的な支援活動を出来る範囲で行うため、「東北被災地応援団 白金支部」という草の根活動団体を立上げ、長期に渡り女川町で支援活動をしていきます。
メディアでの報道は希薄になりつつあるが、未だ被災地では厳しい状況の中で日々の生活を精一杯頑張ってる方々がいいます。そんな現状を私達の周りに伝えることで、少しでも多くの方に継続的な支援を実施していただける環境作りと、被災地の皆様の笑顔を取り戻すことが出来るよう活動していく所存です。

2. 女川町とは

女川町は宮城県の東に位置し、日本有数の漁港、女川漁港で知られた町。北上山地と太平洋が交わる風光明媚なりアス式海岸は天然の良港を形成し、金華山沖漁場が近いことから、地方卸売市場には暖流・寒流の豊富な魚種が数多く水揚げされていきました。町の南には石巻市とまたがって東北電力女川原子力発電所があり、東北地方に電力をもたらしていました。

3. 活動計画

縁あって行くことになった宮城県牡鹿郡女川町を継続支援することを目標とする。

主な活動は以下のとおり。

- ・避難所での炊き出し（メニューは都度現地情報より決定）
- ・在宅避難者向け青空市場（フリーマーケット方式で物資をシートの上に並べ、必要な物資を持っていただく）
- ・レクリエーション
- ・ボランティアセンターでのボランティア活動参加
- ・被災地の子供達を東京へ招待

4. 活動報告

今回現地入りしたのは、新たなメンバーを加え、関東（東京、神奈川）より9名。
後方支援部隊として、事前準備・当日の仕込み・宿泊先手配を担当したのは10名で、総勢19名のチーム。
訪問したのは、宮城県牡鹿郡女川町の避難所2箇所「勤労青少年センター・第1保育所」。在宅避難者のいる「石浜地区」。仮設住宅のある「清水地区・第1小学校」。
事前に女川町災害ボランティアセンター 須田さん、在宅被災サポート「REAL EYE」の高橋ご夫妻、女川町に集う個人ボランティアの「テント村だいじょうぶ屋」石田さんと連絡をとり、炊き出しの希望メニューや、現地で必要とされている物資の情報を出来る限り訪問ぎりぎりまでヒアリングし、被災地とのニーズがマッチングするよう心掛けました。

以下、活動内容について報告します。

(1) 準備期間、炊き出しメニュー・支援物資

A. 準備期間：2011/6/5 ~ 2011/6/30 (約1ヶ月)

B. 炊き出しメニュー

・ 陽子の激旨ポトフ 200 食分

・ ゴージャス浅漬け 200 食分

C. 支援物資

食品関係

・ 生野菜セット 300 食分

・ 無洗米、調味料、レトルト食品、カップラーメン、袋入りラーメン、ほか

日用品

・ 食器、衣類、電池、爪切り

医薬品関係

・ 虫さされ、虫除けスプレー、香取線香、日焼け止め、防臭スプレー

(2) 活動レポート

2011年7月1日(金)

後方支援部隊メンバーにより日中から野菜セット、炊き出し食材のカット、炊出し道具一式、支援物資を移動車に積み込み。

現地入りメンバーは各自仕事後に集合し、積み込んだ荷物を確認し、車の中の空いてるスペースには皆の決意と熱意を詰め込み。

無事に帰ることを見送りに来ていただいた方に誓って22:00に第一陣、23:00に第二陣が出発。

首都高速天現寺ICより一路宮城県へ。

2011年7月2日(土)

東北自動車道を300km走ったところ「菅生PA」にて合流。

給油と一時間の仮眠を挟み出発。石巻港ICを降りて石巻街道～万石浦沿いの女川街道を通り女川町へ。

前回参加メンバーは、道中 石巻市内の変化を見て皆一様に驚きの表情を隠せず。

前回はその悲惨な有様に言葉を失いましたが、今回はその急激な復興振りに驚かされました。

車や瓦礫に埋もれていたパチンコ店は営業しており、道路脇の民家にあった車や瓦礫は、そのほとんどが回収され、一見すると普通の地方都市のような様相となっていました。

しかし女川町内は、石巻とは違い瓦礫撤去の進捗は遅く、前回よりは大分片付いていましたが、まだまだ復興したというには程遠く、メディアで報道されているように「震災八工」といわれる八工が大量に飛んでおりました。

女川町入りしてまず先に、震災被害でお亡くなりになられ、諸般の事情でご遺体の引取りがなされなかった方々が埋葬されている鷲神公園内の合同埋葬所へ赴きました。

お亡くなりになられた方々へ、お花とお線香をあげ、お悔やみとこれからの活動についての決意を伝えてきました。

今回は「避難所での炊き出し班」、「在宅避難者への物資配給をする青空市場班」とに分かれての支援活動となりました。

以前より課題であった「現地ニーズの把握」、「情報の収集」をする為、被災者と信頼関係が築けるコミュニケーションをとることを、各自の目標としてそれぞれの担当する場所へ。

【避難所での炊き出し班】

担当者: 5名 炊き出し班リーダー……石垣、レクレーションリーダー……水澤

炊き出し会場は勤労青少年センター・第1保育所。勤労青少年センター・第1保育所合わせて約220名の方が生活されています。

主食は現地の方々で用意できるとのことだったので、野菜が盛りだくさんのポトフと前回大好評だった浅漬けを提供。

やはり経験は大事なもので、手際よく準備を始めると設置からお湯張りまでスムーズに完了。

勤労青少年センター・第1保育所には、子供が6名と少人数だった為、炊き出しの準備の傍ら、緊張している子供たちと鬼ごっこやボールを蹴りながら、遊んでいると周りの大人の方々も自然と笑顔になっていました。やはり子供の笑顔はなによりの力になることを今回も実感しました。

炊き出しがある程度落ち着くと、炊き出しの配食前の1時間くらいの間、子供たちへ割り箸を使った図形クイズのレクリエーションを実施。大人に出してもなかなかできないクイズなので子供たちも悩んでいましたが、ヒントを出して答えを出すと他には他にはと聞かれ慌ててその場で考える場面も。

子供がいま何が欲しいか聞くために用意した模造紙には、ゲーム機や携帯電話などもあったのですが、皆が書いていたのが、色ペンや紙粘度などの文房具や工作道具でした。

紙に何かを書くことや自分の思ったままのものを作るということで、おそらく子供たちの中にあるストレスや思いを吐き出したいのかもしれませんが、次回以降の活動に向けて非常に貴重なことを知れたと思うのと同時に、レクリエーションの内容をもっと充実させることが必要だと感じました。

レクリエーションが一通り終わると、炊き出しの配食時間となり、勤労青少年センターの方にアナウンスしていただき、12時より配食を開始。炊き出し前に現地の方としっかりコミュニケーションをしていたことと、炊き出しをするという情報がある程度伝わっていたこともあってか、

前回の女川第一小学校のときとは違い、配食開始とともに一斉に避難所の方が集まってきました。

町中で声をかけて歩いた効果があり、避難所以外の自宅避難の方も若干名おいでになりました。

何回炊き出しをやってもやはり食べていただいた方の感想を聞くまでは不安は消えないもので、お口に合うか心配していましたが、食べていただいた方から「美味しかったです」と言われると一安心したのと同時に、より頑張る力が湧いて来ました。

さらには、子供たちが苦手とっていた人参を「甘くて美味しい」と言って食べてくれる姿を見れたことはなにより嬉しかったです。浅漬けについては、ポトフよりもおかわり率が高く今回も大好評だったので、支援活動の定番メニューになりそうな勢いを感じました。

13時過ぎに一通り炊き出しを配り終わってから、各自現地の方と会話をすると、比較的被害の少ない家でライフラインが整っていない為、避難所で生活をしている人や、仮設住宅に入りたいが自活できない為、避難所で生活している人、漁港の復活に動いている人など色々な事情を聞くことができました。話していて感じたのは、20代～30代の若者が少ないこと。やはり、動ける人は仕事を探して女川町を離れていっているとのこと。年輩の方と、子供たちばかりの避難所では、遠くの商店に買い物に行くのも難しく、まだ自立した生活が成り立っているとは言えません。

また、限られた場所、限られた活動、限られた人たちの間で、大人よりも子供たちのストレスが高まっているのを強く感じました。

衣食住が整った後の自活をする為の仕事、特に漁港町の女川町では漁業に復活が何よりの復興になるのだと感じます。

子供たちに散歩しようと誘われていったのも、女川漁港を見渡せる高台で子供たちは事細かに震災前の漁港の姿を伝えてくれました。散歩の帰り際に子供たちに「女川町は好き？」と聞くと、皆「大好き、はやく魚が食べたい」と言っていたことから漁業の復活が重要なのだと感じました。

炊き出し会場での片付けを14:30までに終わらせ、勤労青少年センターの方に挨拶を済ませ、前回「次はいつ来るの？」と言われた子供との約束を果たしに、女川第一小学校に向け出発

【在宅避難者への物資配給をする青空市場班】 担当者:3名 青空班リーダー…相原

私達は少人数の任意団体だからこそできることはなにか？を探る中で、「行政支援の行き届かない場所への直接支援ができないものか」と考えました。

そこで今回は、自活を余儀なくされている在宅避難者、仮設住宅居住者への支援を試みました。

それは、「フリーマーケットような楽しみのある物資の配給」という支援で、私達は「青空市場」と名づけました。

事前に現地情報を収集する中で、「REAL EYE」というサイトを立ち上げ現地にて行政区域外の支援活動を続けていらっしゃる高橋さんご夫妻と連絡を取ることができました。彼らは女川町民として被災し、現在は石巻で避難生活をしながら“支援物資の収集”“女川町サポート”に奔走されている方々です。

私達は彼らからさまざまな指南をいただくことができました。

また、必要な物資の情報は「テント村 だいじょうぶ屋」というサイトからも拾うことができました。

(テント村 だいじょうぶ屋さんも、現地で支援活動を続けるボランティアをサポートしている方々です。)

これらの情報をもとに、暑い中でも傷みにくく応用の利く野菜、インスタントラーメン、レトルト食品、食器類、虫除け・虫刺されスプレー...など、現地の細かいニーズに合わせた物資を準備することができました。

現地では、高橋さんご夫妻や、彼らの活動に共感し広島・岡山より高橋家に泊まり込みで手伝いに来ている

ボランティアの方々にも同行いただきました。

青空市場では私達の用意した物資のほかに「REAL EYE」に届いた物資を区分け～配布しましたが、彼らのお陰で「被災者と心の距離感が近い活動」をすることができた気がします。

最初に向かったのは石浜地区。 10-15戸（20人）ほどの小さな集落が残っているエリアです。
元気の良い初老のおば様が多いエリアでした。
高橋さんに先導されて何うと「いつもありがとうね」と声を掛けられます。
私達は初対面でも、根を張って活動されている方を通すことで、信頼して受け入れていただくことができました。

未舗装の狭い道路脇には「 家 名」と札を下げた籠が並べて用意されていました。
車から支援物資を降ろすと、皆さんが平等に持出し合い、ご自分達で仕分けをしてくださいます。
物資受取のルールが整備され、皆さんが協力し合ってる印象を受けました。
用意したお茶やコーヒーを勧めると、皆さんその場で座り始め即席のお茶会が始まりました。
やや高台のこの場所は、すぐ裏に大木を抱え、山につながっていく地形で緑が多いため、ゆったりとした気持ちでお話を伺えました。

元々は100人程が住む、コンパクトだけど割と賑わった住宅エリアだったこと
津波で青空市場開催場所からすぐ下までの家が全て流されてしまったこと
高台にある空き家に移って暮らしたり、被災の少ない家に数家族が集まって暮らしているケースもあること
それもできず多くの方が避難所や仮設住宅への移住となり、住民がバラバラになってしまっていること
最近始まった巡回商店が運んでくる限られた商品しか購入できないこと
稀に来るボランティアによる支援で何とか生活備品を整えていること
多くの方が近隣の水産加工会社などに勤めていたが、会社が壊滅したため職を失って生活基盤の見通しが立っていないこと
生活資金、今後の見通しのなさから外へ流出している人もいること
気温の上昇により蟻が大量発生してその対処に苦慮していること

それらのお話は、目の前に広がる途方もない被害を抱えた人々の「この町がどうなっていくのか」
「自分達が生活する町を取り戻せる日はいつ来るのだろう」という不安をそのまま表しています。

しかし「家が津波被害を逃れたんだから贅沢は言ってもらえないよ」と要望をあまり口に出すことなく過ごしている方や、
「大丈夫。今はこうして支援いただいているお陰でちゃんと生活できているからありがたいよ」と話で下さる方もいました。
津波が駆け抜け、突き抜けた家々が今も生々しく残っている...そんな中で「前を向いて行かなきゃ」という皆さんの
姿勢はすごく力強いものでした。

ある人が語ってくださったエピソードが非常に印象深く心に残っています。
「地震の後ね、段々考え方は変わったよ。 孫が学校でいじめられるって言うんだよね。 学校にもいろんな支援が届いたり、
元気付けようという趣旨のイベントみたいなものがあるらしいんだけど、その度に『お前のところは家が残ってるんだから
いいじゃないか』って言われて、最初は前に出れてたのが、どんどん後ろに下がるようになって。 引込むようになって言うんだよね。 それを聞いて、ああ私たちがこれじゃいけないんだな。
私達も被災者なんだもの。 被災者だと思っていないと孫が卑屈になっちゃうんだって。
だから申し訳ないって思いすぎるのやめたのよ。」

彼らは行政からの支援がなく、見捨てられていても謙虚に生きている。
もっと助けなきゃ、もっとこの状況を色んな方に知ってもらわなくては、と強く感じたエピソードでした。

次に向かった驚神地区では、諸般の事情により支援物資を配ることができませんでした。
そこで、ある程度まとまった人数がいる新しくできたばかりの清水地区の仮設住宅へ何うこととなりました。
ここでは140戸ほどの仮設がひしめき合っています。
定期的に巡回の商店も来るようですが、すべて自活が前提で配給ゼロでは厳しい状況のよう。
こちらではブルーシートを広げ、フリーマーケットのように物資を種類別に並べて「青空市場」を開催しました。
事前のリサーチであがっていたのは米、油、味噌、醤油といった食料品。

これらは毎日の自炊に欠かせない食材なのでやはり不足しているようです。

青空市場は大盛況で、皆さん各々に食器や衣類も喜んで持って行かれ、たくさんの感謝の言葉をいただきました。

ただ気になったのは被災者同士の会話が少なかったこと。

すまなそうに選んでゆく方もいれば、バーゲンのように我先に！という方もいます。 小さな集落でみられる譲り合いや、お互いの家を気にして声を掛け合う姿のない寂しさがありました。

移住されたばかり故にか、まだリーダー役の方が決まってない状況で、集落としてのコミュニティーはこれからだと感じました。元々は小さな近所づきあいをしていた人々。失くしたものが多すぎて、余裕がなくなっているのかもしれない。そんな仮設住宅故の難しさも垣間見たように思います。

最後に、残りの支援物資を持って、前回伺った女川第一小学校の仮設住宅へ向かいました。

仮設の数は57戸。リーダーの岡さんが大変前向きかつ元気な方です。

女川町で1番最初に建てられた仮設住宅ということもあり、清水地区と比べるとすでにひとつの共同体としての輪ができています。 ほぼすべての物資を滞りなく手渡すことができ、皆さんに喜んでいただけました。

また、前回仲良くなった子供数名とその親御さんにも会え、束の間の再会を祝うことができました。

「来るなら言っといてくれないと」と地域定着を目指す私達には嬉しい声も掛けていただきました。

若干残った小ダンボール1箱分の野菜は、妊婦さんと乳幼児を抱えるお母さんが身を寄せ合って在宅避難しているお宅へ、高橋さん自身が届けてくださることになり、すべての物資が活かされました。

今回の活動を通じ、「支援がないところ(=自宅避難者や仮設住宅居住者)への支援は欠かせない」という想い、

「行政が全くケアできていない小さな集落へのマクロのサポートをしてゆきたい」という想いが強くなりました。

今後は避難所が閉鎖(8月一杯が目標)になるにつれ、仮設住宅で生活する方が増えます。

仮設に移れなかった一人暮らしの方へのサポートをどのようにしていくか、今後現地の方とどのように連絡を取り合い必要支援情報を得るのか...等、考えるべきポイントや課題も多く、たくさんの実りがありました。

【現地支援団体】

ニッサン石鹸様よりご支援いただきました「洗濯用液体洗剤 ウルトラファーフア」ですが、テント村だいじょうぶ屋さん、REAL EYEさんに各200本無事に届いておりました。

先にお送りいただきましたテント村だいじょうぶさんは、すでに女川町内の在宅支援者に向けて配布いただいております。

また7月7日に大口いただきましたREAL EYEさんは、本日7月10日に女川町第1小学校仮設住宅への配布を予定している旨、連絡を受けております。多大なるご支援とご理解ありがとうございます。

2011年7月3日(日)

早々に起床し、仙台宮城ICより一路東京へ。

高速道路ではボランティア団体のバス何台かと遭遇しましたが、前回と比較して数が少なくなっていました。

徐々にボランティアが必要なくなって被災地の方々が自活できることは非常に良いことですが、現状はまだボランティアや行政、企業レベルでのサポートは必要です。

私たちの活動は微力ではありますが、色々な方にご理解いただき少しの支援を多くの方から被災地に向けて行っていただけるよう、出来ることをやり続けようと思いを馳せながら帰宅の途へ。

以上、簡単ではありますが活動レポートとさせていただきます。

草の根的な活動ではありますが、少しでも早く東北地方が復興出来るよう微力ながら続けていこうと考えております。

今回の活動に物資ご提供いただいた各社様、支援金を寄付いただいた皆様、ご協力いただいた皆様に感謝いたします。

それとともに引き続きご支援ご協力の程宜しくお願い申し上げます。

(1) 経験、実績を残したこと

前回参加者に加え、支援の輪の拡大に向け新規メンバーが経験を積めた点

(2) 現地の状況を知れたこと

複数箇所でフェイスtoフェイスのコミュニケーションがとれたことで、幅広く情報を得ることができた点

(3) ネットワークが持てたこと

現地活動団体の方や避難所代表者等の多くにキーマンとネットワークを持てた点

6. 今後の展望

(1) レクリエーションの充実

子供だけでなく大人に向けたレクリエーションも求められてくると思われる。

さまざまなストレスから少しでも開放される時間が作れるように、遊び以外にマッサージや芸といったレクリエーションも検討が必要。炊き出しのニーズが少なくなり、物資も充実していくことを想定した場合、レクリエーションでリラックスを提供する形の支援活動が今後の重要なファクターになると考えています。

(2) 支援の輪の拡大

今回新たに参加したメンバーがいるように、そこからまた新たな支援の輪を広げ、

新しいアイデアや協力者を増やすことで支援の幅や内容の充実に繋がると考えています。

現地には行けなくても何かしたいと思っている人はたくさんいらっしゃるはずで、そのニーズを掘り起こすことができれば、より多くの方の支援を被災地へ届けることができると思います。

(3) 相互交流機会の創出

被災地のスポーツチームを招待するプロジェクトも企画中です。。

被災地のチーム、地元チームとの話し合いを行い、徐々に形になってきているが、資金確保の問題を解決しどんな形で実施するかを継続して計画していきます。

7. 課題

(1) 現地ニーズの把握

支援活動を続けていく上で常に挙がる課題。

刻々と変わる現地ニーズを把握するには、今回連絡先を聞いた現地活動団体や避難所の方と、タイムリーかつ定期的な情報交換が必要となる。

(2) 行政管理地域以外への支援方法

地元の復興が進むにつれ、地元コンテナ商店と私達ボランティアの両立をどう図るのか。

(3) 活動情報の発信

今回から支援金や募金活動を実施しているが、どういう団体でどういう趣旨で活動しているかを伝える媒体がないことで、誤解や語弊が生まれるリスクがある為、改善策としてチラシやWEBの作成を色々な観点での検討とアクションが必要だと思います。

8. 補足事項

(1) 参加者

工藤 史大 (東京)	石垣 健 (東京)
水澤 秀之 (東京)	小澤 徹 (東京)
相原 朋子 (神奈川)	野口 砂絵子 (東京)
松原 徹弥 (東京)	斉藤 秀朋 (東京)
近藤 尚之 (東京)	

(2) 後方支援、手伝い (敬称略/順不同)

小澤 雅志	川端 陽子
伊藤 和子	加藤 聡
橋本 翔二	大脇 智子
藤川 芳江	若本 智子
小沢 静子	藤本 佳代子

(3) 支援物資提供、支援金 (順不同)

ニッサン石鹼株式会社 様	日本ファシリテーション有志 様	高橋 政代 様
目黒GONE 様	高橋 正剛 様	須田 克美 様
品川生活者ネットワーク 様	久保田 様 (尚礼会)	渡邊 光崇 様
三浦 富美雄 様	勝村 淳 様	葛西 みどり 様
山中 秀樹 様	加藤 豊 様	田中 様
白金杯一同 様	井上 富喜 様	宮川 武久 様
石川 重美 様	藤井 麻未 様	算 定夫 様
石川 俊子 様	加瀬 友貴 様	池上 様
山口 奈緒美 様	田中 恵 様	山口 理美子 様
榊原 敏夫 様	藤川 芳江 様	野口 砂絵子 様
小川 将輝 様	小杉 様	石川 篤史 様
戸田 裕昭 様	川端 陽子 様	株式会社同文社
山本 めぐみ 様	相原 朋子 様	工藤史大
山城 琢郎 様	入谷 盛知 様	

支援金箱

目黒GONE 様	ホルモン焼き夏冬 様	東北被災地応援団集合場所
----------	------------	--------------

(4) 行政支援

- ・ 災害派遣等従事車両証明書 (港区防災課より発行)

(5) 現地受け入れ先

宮城県女川町災害ボランティアセンター

皆様からのあたたかいご支援・ご協力のうえて成り立っております。

本当にありがとうございました。

継続して被災地への支援活動をしていきますので、今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。

平成23年7月10日
東北被災地応援団 白金支部
工藤史大